

フーテン人生

無邪気な

視点

#02

司令塔不在の日本

ある。なでしこの戦術は1975年の日本の女子バスケットが世界選手権で称賛された「忍者ディフェンス」と「マツハ攻撃」を彷彿とさせた。

例えば、右のポジションに居たはずの選手がプレー中にいつの間にか左に居て、しかもチーム全体の動きのバランスは崩れていない。むしろ、相手チームの守備がその動きに動揺している。こうした動きを可能にしたのは、なでしこなら澤穂希選手という絶対的な司令塔の存在があったらばこそだろう。

なでしこジャパンの快進撃とW杯優勝は、大半の人々には意外であっただけに日本中を驚かせ、且つ喜ばせてくれた。そして、なでしこたちの背景からは、我々が学ぶべきものが垣間見えるような気がした。

大会開始当日、あるスポーツ新聞記者と出くわした。「今日から女子サッカーW杯ですね」と言うと、「ああ、どうせ欧州勢にケチヨンケチヨンにやられるでしょう。あのもったり感が観ていてイライラする」もったり感というのは、スピードと力が男子とはまったく違うから、男子サッカーを見慣れた目には動きがのろく感じるということだろう。確かにそうではあるが、遅いからこそ素人目に確認できる技術や戦略も

が日本のサッカーの変化を感じ始めたのではないか。さらに完成を高めたバスサッカーは昨年の男子W杯へ、今回のなでしこへと引き継がれた。

ところで、1850年代に開国要求をした欧米列強と、戦後日本を占領したGHQは、日本という国に対して同じ印象を持ち、同じ戸惑いを持っていた。誰がこの国の長で、誰が決定権を持ち、誰が最高責任者であるかが分からないので、誰と交渉すべきかが分からないという困惑である。

しかし、日本には営々として継続するぼんやりした統率観があり、かつ個々の意識が高く責任感が強いので、国、地方政府、そして企業のよいうなどな共同体でも同じように一つの目的のために機能していくという特徴がある。強いリーダーはむしろ不要であり、時としてリーダーは機能不全でも組織は機能しているのもそのためである。この日本式も我々の知恵でもっと進化させられたらどうか、と思うわけである。

なでしこが我々に教えてくれたこととの一局面に、統率力と日本式とのバランス感覚がある。なでしこたち

も個々の責任感が高い一方、心技の面ではカリスマ的な存在である澤キヤブテンと、緩やかなまとまり感を尊重し、選手起用を理論的に説く佐々木監督によって統率された組織だった。言い方を変えれば、現代日本人としてのこだわり、あるいは日本式カスタマイズだろうか。どんなに斬新で素晴らしいアイデアがビジネスに導入されようとも、それを活かすには、個々の責任者たちが納得の行く方法を試行錯誤の中から作り替えていく過程が必要であったのではないかと考える次第。ちなみに、筆者はサッカーについては素人の素人。ただし、国際的なマネジメントの経験から比較文化論として述べさせていただいたが、いかがお考えだろうか。

マック木下

世界航空旅行業、世界的弱電企業などの国際畑で育ち過ぎた50代。1980年代から主に英国に住み、英人が本名をちゃんと発音できなかったので、いつしかマックに。ジャンルには無節操なライターで、執筆歴は10年間ほど。専門は日英関係史とロンドンの歴史散歩。寄稿先は『英国特集』『R.S.V.P.』『Quality Britain』『Taste of Britain』『未来教室』『ぼんじゅーるレマン』のほかミニコミや会員誌など。